

中国語の「動賓複合語」から見た日本語

鵜 殿 倫 次

0 動賓複合語

- 1 「はらをたてる」と「はらがたつ」
 - 1.1 「はらをたてる」「はらがたつ」は複合動詞
 - 1.2 対象名詞の導入による二項文
 - 1.3 「はらをたてる」と「はらがたつ」一動詞部は自他対応、「に」格による二項文は自動
 - 1.4 「はらをたてる」はなぜ自動か？
 - 1.5 「足を踏み入れる」「耳をかす」一動詞部は他動のみ、「に」格をとり二項文は自動
 - 1.6 「～に胸をいためる」と「～に胸がいたむ」一ふたつの自動文の違い
 - 1.7 「けちをつける」一動詞部は自他対応、「に」格による二項文は他動
- 2 「あてがはずれる」一動詞部は自動、「の」格により対象を導入する自動
- 3 「をーが」格をとるもの
 - 3.1 「あてにする」と「あてになる—「あてにする」は「を」格をとり他動
 - 3.2 「あてにできない—「を」格をとるが自動
- 4 「はらをさぐる」と「つてをたよる」—「の」格をとり他動
- 5 「しゃくにさわる」—「が」格をとり一項文は自動～所動
- 6 「らちがあかない」一動詞部は自動、二項文にならない

0 動賓複合語

中国語では“毕业”“帮忙”のように二つの形態素で構成され、形態素間がV-Oの統語関係をもち、かつその形態素の組み合わせが語としての機能をもつものを動賓複合語とする。「動賓複合語 V-O compound」というのは趙元任¹⁾の呼び方だが、これらはアスペクト・マーカ―や動詞接尾辞が動詞形態素に接尾してVOが分離することがあり、離合詞とも呼ばれる。しかしVO関係もちながら分離しない動賓複合語もあるから「離合詞」という呼称は適切ではない。複合語と呼ばれるのは、意味的にも統語的にも二語のフレーズではなく、一語と考えられるからだ²⁾。

中国語から見ると日本語にも動詞的な形態素に名詞を配した慣用語が多く存在することが分かる。本稿では、それらをいくつか挙げて、中国語の動賓複合語を見る視点で考察してみたい。

ここでは中国語の「動賓複合語」という言葉を借りたが、日本語の「はらがたつ」のような「名詞—助詞—動詞」の配列をなす複合語は、「はらをたてる」のように動詞部が他動の場合もあれば、「はらがたつ」のように自動の場合もある。中国語では名詞成分が動詞の後ろに配置され（それゆえ動賓V-O複合語という）、日本語では動詞の前に配置される。したがって日本語は「名動複合語」と呼んだほうがよいかもしれない。

そして中国語でもそうだが、多くの場合、複合語はさらに「主体」、「対象」などの意味役割をもつ名詞をとり、二項文を作れる。対象名詞を導入する場合、どんな格助詞を用いるかという違いもある。「～にはらをたてる」のように「に」格をとる者、「～をあてにする」のように「を」格をとる者だけでなく、「～がしゃくにさわる」のように「が」格をとる者や「～のはらをさぐる」のように「の」格をとる者もある。

またさらに、このようにしてできた二項文は、動詞部が他動であっても「私はそのことにはらをたてる」は「そのことは私にはらをたてられる」と受動にできず、自動と考えられるものがある。また「私は彼を馬鹿にする」が「彼は私に馬鹿にされる」のように受動にでき、他動と考えられるものがある。

ここでは試論として、こうした分析の視点によって、日本語の複合語を検討してみたい。

1 「はらをたてる」と「はらがたつ」

1.1 「はらをたてる」「はらがたつ」は複合動詞

形態素に分ければ「はら」「を」「たてる」であるが、それを組み合わせた意味と「はらをたてる」〈怒る〉とは意味が異なる。「たつ」は、「建つ」や「立つ」ではなく、「気がたつ」「いきりたつ」「湯がわきたつ」などの「たつ」に由来する。しかし「はら」というのは文字通りの腹部や胃腸という意味ではなく、抽象的な「感情」「気持ち」あるいは抽象的な「気」という意味であると考えられる。この意味の「はら」という形態素は一語で使われることは少ない。身体名称としての腹部以外を意味する場合、「はら

をきめる」「はら黒い」「(出馬する) はらだ」「かたはらいたい」など慣用句の部分として使われる。「たつ」は「霧がたつ」「けむりがたつ」「泡がたつ」の場合は独立した語として使用でき、自由形態素と考えられるが、「気持ち」あるいは「意」という意味の「はら」は拘束的形態素と考えられる³⁾ので「はらがたつ」は一つの複合語と考えるべきで、辞書でも「はらがたつ」は慣用句としている⁴⁾。

複合語「はらをたてる」と「お茶をたてる」を比べてみる。前者は慣用語でひとつの語もしくは語に相当する句(フレーズ)である。「お茶をたてる」は句(フレーズ)である。「お茶をたてる」は「お茶を昨日、三百人にたてた」のように間に副詞や対象名詞を挿入することができる。「はらをたてる」は「彼ははらをいつもその女子従業員にたてる」は破格的で、不自然である。また「お茶をたてる」は「これからたてます、お茶」のように倒置できるが、「今日とうとうたててしまった、はらを」と倒置すると「今日どんな目標をたてましたか」への応答の「ギャグ」として言うことはありうるが、自然な会話としては不適当である。このような理由から「はらをたてる」は結合度の高い、複合語と考えられる。もっとも逆に言えばこの複合語はこうした分離的な使用ができないことはないという性質があることも確かである。

1.2 対象名詞の導入による二項文

このような複合語と思えるものは中国語の動賓複合語⁵⁾とよく似たことが観察できる。例えば、動賓複合語“生气”の場合と比べて見よう。

“生气”は「はらをたてる」という意味だが、「はらをたてる」対象を示す対象名詞をとって二項的になれる。対象名詞は前置詞“跟”で導入する場合と“的”による所有格で導入する場合(いわゆる領属目的語)がある。

我跟他生气。〈私は彼に腹をたてる〉 前置詞“跟”で対象名詞を導入
我生他的气。〈私は彼に腹をたてる〉 領属目的語で対象名詞を導入

領属目的語をとる場合、“生气”の“生”と“气”が遊離し、その間に領属目的語が挿入される。一般に領属目的語をとりうる動賓複合語は、離心的にならない⁶⁾。すなわち対象名詞を他動詞の目的語のように後ろに置いて“生气他”とはならない。

もちろん中国語の動賓複合語には、離心的になるものもある。例えば“怀疑〈疑いをもつ、疑わしく思う〉”は、対象名詞をとる場合、“我对他怀疑”のように前置詞“对”によって導入する場合と“我怀疑他”のように目的語として導入する場合がある。離心的な“怀疑”の場合は、“怀”と“疑”が遊離して“我怀他的疑”と領属タイプの目的語をとることははない。このことは鶴殿2010で指摘した。

対象名詞の導入のしかたにおいて“生气”と“怀疑”はそれぞれ向心的と離心的と異なるタイプの複合語であるけれども、いずれにせよ行為の「主体」となる名詞と「対象」となる名詞の二項をとることができる。

1.3 「はらをたてる」と「はらがたつ」—動詞部は自他対応、「に」格による二項文は自動

ところで、日本語の「はらをたてる」の場合も、「対象」名詞を導入することができる。この場合、対象名詞は「に」格で導入する。「を」格や「の」格はだめである。

- 彼にはらをたてる。
*彼をはらをたてる。
*彼のはらをたてる。

もちろん「に」の代わりに「にたいして」は可能である。では「のことを」を用いたらどうだろう。「俺はあいつのことはらをたてているんだ」は不自然であるが、「彼をはらをたてているんだ」よりは許容度が高いと言える。つまり「を」格がまったくだめとは言えない。もっとも「のことを」を「を」と別の格表示とすれば別である。多分そう考えるべきだ。

ところで「はらをたてる」にたいして「はらがたつ」も複合語である。複合語であることの証明は「はらをたてる」と同じなので省略するが、両者の動詞形態素は「自他対応」している。「肝がすわる」と「肝をすえる」、「きがつく」と「きをつける」などと同様である。なお「自他対応」しているというのは、動詞形態素の形についてであって、複合語がそれぞれ自動詞・他動詞であるという意味ではない⁷⁾。複合語として認定した場合の「はらをたてる」「肝をすえる」「気をつける」は自動詞である。

「はらがたつ」に対象名詞を付加するには、「に」格、「が」格が可能で

ある。「に」の替わりに「にたいして」を用いることもできる。「を」格や「の」格はだめである。

彼にはらがたつ 彼にはらをたてる。
彼がはらがたつ *彼がはらをたてる。 彼のことがはらがたつ。
*彼をはらがたつ *彼をはらをたてる。 彼のことをはらをたてる。
*彼のはらがたつ *彼のはらをたてる。

この場合の「彼がはらがたつ」は、「私は彼のことがはらがたつ」という意味である。「私は」という取り立て形をやめて「私が」とすると「私

が彼がはらがたつ」と「が」を三つ使用できることになる点がおもしろい。いずれにしても「主体」に「が」、「対象」に「が」を導入できるわけである。「が」が二つ使用できるのは「きらいだ」のような形容動詞が「私が彼がきらいだ」という場合と同じことだ。

ところで対象名詞に「に」が導入できる点では、「はらをたてる」「はらがたつ」は同じである。「が」は「はらをたてる」には使用できない。「彼がはらをたてる」の「彼が」は主体の意味になってしまう。

1.4 「はらをたてる」はなぜ自動か？

では「はらをたてる」と「はらがたつ」はどういう違いなのだろうか？「たてる」と「たつ」は形態論的には他動と自動である。しかし「はらをたてる」と「はらがたつ」は、どちらも対象名詞を導入する場合「に」格を求めるが、統語的にはどちらも自動なのである。

「はらがたつ」は「に」のほかには「が」をとれ「かれがはらがたつ」が言える点を見ると、「彼がきらいだ」のような感情形容詞と同様である点から自動的である。「はらをたてる」は対象名詞を導入する場合「が」をとって「かれがはらをたてる」とは言えないが、「かれのことをはらをたてている」がなんとか許容できると述べたが、それは「かれのことを{すぎだ／きらいだ}」と同程度の許容度であり、やはり「はらをたてる」は自動であると言ってよいだろう。

「私は彼にはらをたてている」と「私はかれにはらがたっている」は、どちらも「主体」と「対象」をともなっている。「主体」と「対象」をともなうのであれば、他動文のように見えるが、これは真正の他動文とは異

なり、自動文である。

「私には彼にはらをたてている」をもし「彼に」を対象とする他動文⁸⁾であるとすると、ヴォイスを変換して「彼」を主語にした受動文が言えるはずである。

能動 私には彼にはらをたてている。

受動 ?彼は私にはらをたてられている。

「私」を受動の主語にした文のほうがよいとすれば、主体と対象をひっくり返して「私には彼にはらを立てられている」となるが、あまり聞かない言い方であり、かなり不自然だ。あり得るとすれば「迷惑の受身文」としてであり、だとすれば「はらをたてる」は自動である証しとなる。このことから「私には彼にはらをたてている」は他動文ではなく、自動文に相当していることがわかる。すなわち、「主体」と「対象」の二項をとともう状態的な自動文「私は彼がきらいだ」のようなものに相当するのだ。

「はらをたてる」「はらがたつ」のように、動詞形態素が自他動の対応をして、「に」格の対象名詞をとっても受動文になりにくい類は、他にも「まにあう」「まにあわせる」がある。「まにあわせた」のほうが行為的であるが、やはり受動文にはならない。

彼は時間になんとかまにあわせた。彼は時間になんとかまにあった。

*時間は彼によってなんとかまにあわせられた。

「私は彼に [はらがたつ]」と「私は彼に [はらをたてる]」の [] 内の「たつ」と「たてる」は自他動の関係だが、文としてはどちらも自動文であり、これは「はらがたつ」と「はらをたてる」が実際にはヴォイスの対立ではないことを意味していると述べたが、この部分は「木は [芽を出した]」と「木は [芽が出た]」のように、「出した／出た」が自他動の関係だが、ヴォイスの対立ではないのとよく似ているわけである。

能動 木は芽を出した。

受動 *芽は木に出された。

「木は芽を出した」は受動に変換できない。したがって「芽を出した」は自動である⁹⁾。この「～がでる」「～をだす」がとも自動であるのは、「～にはらがたつ」と「～にはらをたてる」がともに自動であるのと同じである。それは次のように対象を主語とする受動が言えないからである¹⁰⁾。上では「たてている」の「ている」形で見だが改めて観察してみよう。

能動 私は彼にはらをたてる。
受動 *彼は私にはらをたてられる。

これは「脚を痛める」と「頭を痛める」で考えると分かりやすいかもしれない。「脚を痛める」は二語であるが、脚を主語としたヴォイスの転換はできない。

能動 彼は脚を痛めた。
受動 *脚は彼に痛められた。

二語のフレーズである「脚を痛める」にたいして「頭を痛める」は、文字通りの意味ではなく〈悩む〉という意味の慣用句であり、一語の複合語と考えられる。この複合語は「に」や「で」で対象名詞を導入できる。この対象名詞を主語にしたヴォイスの変換もできない。ヴォイスの変換ができないので「頭を痛める」は自動なのだ。

能動 彼は息子に頭を痛めている。
受動 *息子は彼に頭を痛められている。

このように見ると「はらをたてる」「はらがたつ」による文は、どちらも「主体」と「対象」の二項をとまなう「二項自動文」¹¹⁾と考えるべきである。

二項的な自動文は例えば「木が芽を出した」がそれであるし、形容詞・形容動詞でも二項をとる。「私は彼がきらいだ」も同じだ。「はらを立てる」「はらが立つ」による文はこうした二項的な自動詞・形容詞文とよく似ているわけである。

「はらがたつ」「はらをたてる」のように動詞部が自他対応するもので、

対象名詞を「に」で導入するものに「きをつける」と「きがつく」、「てをだす」と「てがでる」などがある。

「きをつける」「きがつく」は、「に」格で対象名詞を導入する。「暗い道にきをつけて」「怪しい人影にきがついた」のように。そして「きをつける」はその対象名詞を主語にした受動文「暗い道は彼女にきをつけられた」という文は成立しない。「きをつける」「きがつく」は複合動詞としてはどちらも自動詞である。

「手をだす」「手がでる」は同様に「に」格で対象を導入できる。「甘いものに手をだしてしまう」「甘いものに手がでてしまう」のように。そして「手をだす」も対象名詞を主語とする受動文にはできない。

彼は株に手をだした。

*株は彼に手をだされた¹²⁾。

1.5 「足を踏み入れる」「耳をかす」一動詞部は他動のみ、「に」格をとり二項文は自動

もちろん、日本語の動賓複合語は、「きをつける」「きがつく」のように動詞部が自他対応するものだけでなく、片方だけのものもある。「足を踏み入れる」は「足が踏み入る」という自動形はない。

彼は新分野に足を踏み入れた。

*彼は新分野に足が踏み入った。

*新分野は彼に足を踏み入れられた¹³⁾。

「足を踏みはずす」も「足が踏みはずれる」という形を持たない。これらも動詞形態素は他動形であるが、複合語としての統語機能は自動である。

彼は悪の道に足をふみはずした。

*彼は悪の道に足が踏みはずれた。

*悪の道は彼に足をふみはずされた¹⁴⁾。

このほかに、そもそも自他動の交代形をもたず、他動形だけの動詞形態素による複合語も珍しくない。「耳をかす」「ほぞを噛む」のようなもので

るが、前者はただ「痛ましい思いがした」という意味だ。「胸をいためた」は主体的な感情、「胸がいたんだ」は自然に生じる感情という意味で、前者を「能動的自動」、後者を「所動¹⁶⁾的自動」と呼ぶこともできよう。

能動的自動

彼女の死に彼は胸をいためた。
(=痛ましい思いがした)

所動的自動

彼女の死に彼は胸がいたんだ。
(=自責の念を覚えた)

冒頭の、「はらをたてた」「はらがたった」も意味のズレがある。

能動的自動

その言葉に彼ははらをたてた。
(=怒った)

所動的自動

その言葉に彼ははらがたった。
(怒りを覚えた)

前者の「はらをたてた」は彼の感情が他人にも分かる感じであり、具体的に文句を言ったという発語行為¹⁷⁾も意味しうるが、「はらがたった」は感情の内的状態だけを述べるだけという違いがある。もちろん「ている」の状態形にすれば「はらをたてている」と「はらがたっている」では、両者とも感情の状態となり接近するが、「父はまだはらをたてているんです」と言えば、いつもそうしたことを言っている感じがする。「父はまだはらがたっている」と言えば、父の内面の感情を言っているわけで、誰か(小説の語り手など)が父の感情を代弁している感じである。

1.7 「けちをつける」—動詞部は自他対応、「に」格による二項文は他動

「はらがたつ」「はらをたてる」の場合、動詞部が自他対応するが、複合語としては自動詞であった。しかし「つつこみを入れる」「つつこみが入る」は動詞部が自他対応する。そしてこの「つつこみを入れる」は受動が可能である。すなわち「つつこみを入れる」は他動なのである。

能動 彼は私の話につつこみを入れてきた。 私の話に彼のつつこみが入った。

受動 私の話は彼につつこみを入れられた。

このようなものには「けちをつける」「けちがつく」がある。

能動 彼は私の堤案にけちをつけてきた。 私の堤案に彼から(の)
けちがついた。

受動 私の堤案は彼にけちをつけられた。

また「はじをかく」とその使役形「はじをかかす」を対応形と考えれば同様である。このタイプの複合動詞は能格的なのである。

能動 彼は私にその件で恥をかかせた。 私はその件で恥をか
いた。

受動 私はその件で彼に恥をかかされた。

2 「あてがはずれる」—動詞部は自動、「の」格により対象を導入する自動

「あてがはずれる」は、辞書では語彙項目「あて」の下には置かれず、「あてがはずれる」という項目に認定され、これでひとつの熟語もしくは複合語と見なしている。「はずれる」は自由形態素だが、「あて」は「あてにする」「あてになる」「あてがある」「あてがない」などの表現の一部として使用される¹⁸⁾ので、拘束的な形態素である。したがって「あてがはずれる」等は複合語と考えられる。意味的にも、「あて」「が」「はずれる」のそれぞれの形態素の意味を組み合わせ〈あてというものが、本来の軌道から外れた〉という意味とは違って、すなわち〈期待どおりにならない〉という意味である。

「あてがはずれる」は対象名詞をとることができるが「あてがはずれる」対象には属格である「の」格をとり、二項文を作れる。

一項	二項
新店舗はあてがはずれた。	新店舗は <u>集客</u> のあてがはずれた。
集客はあてがはずれた。	

主体と対象が両方現れるときは「～は～のあてがはずれる」のようにな

り、一項だけの場合、主体だけの場合と対象だけの場合があり、どちらも「～はあてがはずれる」となる。

動詞形態素の「はずれる」は自動形であり「はずす」という他動の対応形をもつが、「あてをはずす」という複合語は存在しない。

二項 私は切符入手のあてがはずれた。 *私は切符入手のあてを
はずした。

一項 私はあてがはずれた。
切符入手はあてがはずれた。

「あてがはずれる」は対象を主語とした受動文「切符入手はあてをはずされた」というような文は作れない¹⁹⁾。以上から分かるのは、「あてがはずれる」は動詞部は自動形であり、複合語としても自動である点だ²⁰⁾。

「あてがはずれる」と類似する統語的性質をもつのは「たががはずれる」「たががゆるむ」等である。「たががゆるむ」の領属的对象を主題とする一項文も可能である。なおこれも「たがをゆるめた」という形はもたない。

二項 チームは誇っていた結束のたががゆるんだ。

*チームは結束のたがをゆるめた。

一項 チームはたががゆるんだ。
誇っていた結束はたががゆるんだ。

「たががはずれる」の場合は動詞部が自動側だけで、二項文も自動であった。この「たがはずれる」の統語的性質を、複合語ではなくフレーズである「思惑がはずれる」「予測がはずれる」「予報がはずれる」「見込みがはずれる」などと較べてみると大きな違いがある。まずこれらは動詞部は自他動の対応形が可能である。

三項 NHK は天気の予報がはずれた。 NHK は天気の予報をはずし
た。

二項 NHK は予報がはずれた。
天気は予報がはずれた。

「NHK は天気の予報をはずした」は「天気は NHK に予報をはずされた」のように受動にすることはできない、したがって他動ではなく自動である。この点は「あてがはずれた」と同じである。

しかし「予報」ではなく「予想」を使った「予想がはずれる／はずす」の場合、「予想をはずす」が可能で、さらには自動と他動の場合がある。

タイガースはドラゴンズの投手の予想をはずした。

自動：タイガースはドラゴンズの投手が吉見だと思ったが左のチェンだった。

受動 *ドラゴンズの投手はタイガースに予想をはずされた。

他動：タイガースはドラゴンズが予想した投手ではない投手を出した。

受動 ドラゴンズはタイガースに投手の予想をはずされた。

つまり「予想をはずした」は自動と他動の両義性をもち能格的である。

3 「をーが」格をとるもの

3.1 「あてにする」と「あてになる」 — 「あてにする」は「を」格をとり 他動

「あてにする」は対応形として「あてになる」がある。それぞれ対象をとる場合、「あてにする」は「～をあてにする」と「を」格をとり、「あてになる」は「～があてになる」と「が」格をとると考えられる。この対象に「を」格をとる「あてにする」は受動が可能であり、複合語としては他動である。

他動

能動 我々は彼をあてにする。

受動 彼は我々にあてにされる。

自動

彼が我々にあてになる。

このように動詞部が「する／なる」の対応をもち、対象を「を」格で導

一項

父の援助はあてにできない。
切符入手はあてがはずれた。

二項

私は父の援助をあてにできない。
私は切符入手のあてがはずれた。

「あてにできない」は二項文の「を」格名詞である対象を主語にした一項文が可能である。これは「あてがはずれる」の場合と同じである。このような一項文の主語は「が」格になる。「父の援助があてにできない」「切符入手があてがはずれた」と言える。

このような一項文は、二項文で「を」格名詞であったものを主語としているので、受動かというところではない。二項文の「を」格が、一項自動文では「が」格になるということは、「私がアイスクリームを固める」が「アイスクリームが固まる」となるのと同じことで、対象を主語とする「固まる」は所動的自動である。われわれの「私は父の援助があてにできない」の二項文は能動的自動、「父の援助はあてにできない」の一項文は所動的自動にあたる。

「馬鹿にできない」も「あてにできない」と同様に一項的にも二項的にも使える。

一項

あの人はあてにできない。
この記録は馬鹿にできない。

二項

我々はもうあの人をあてにできない。
君はこの記録を馬鹿にできない。

「あてにできない」「馬鹿にできない」は、このように「を格」をとって二項的に使用することができる。一項文「あの人はあてにできない」「この記録は馬鹿にできない」の「あの人は」「この記録は」は、二項文の対象である「を」格の項が主題化したものと解釈することもできるかもしれないが、この場合は動詞部の voice が転換して「が」格なのだと思われる。「あの人があてにできない」「この記録が馬鹿にできない」の「が」が主題化したものだ。

なお複合語ではなく、フレーズとしての「相手にできない」「商品にできない」も項をとる機能がある。

一項

あんな人は相手にできない。
こんな品物は商品にできない。

二項

我々はあんな人を相手にできない。
我々はこんな品物を商品にできない。

この一項文（実際は二項文）と二項文（実際は三項文）においても、二項文は受動にできないので自動である。主体を主語とする二項文は能動的自動、対象を主語とする一項文は所動的自動にあたる。

4 「はらをさぐる」と「つてをたよる」—「の」格をとり他動

「はらをさぐる」も「はら」を「さぐる」という二語としての「はらを触診する」といった意味ではなく、「本心を推測する」という意味の複合語と考えられる。

この場合、対象名詞は「はらをたてる」が「に」格を要求し「～にはらをたてる」となるのにたいし、「はらをさぐる」は「～のはらをさぐる」と「の」格で対象名詞を導入する。この場合「～にはらをさぐる」とは言いにくい。

上司のはらをさぐる。

* 上司にはらをさぐる。

* 上司をはらをさぐる。

対象名詞を「はら」への所有格で表すところは、次ぎの“请示〈指示を仰ぐ〉”のような中国語の動賓複合語と合い通うところがある。ただし“请示〈指示を仰ぐ〉”は「に」格にあたる“跟”をとって“跟他请示〈彼に指示をあおぐ〉”と言える。

请他的示 彼の指示をあおぐ。

跟他请示 彼に指示をあおぐ。

しかし“告密”のようなものは“告他的密”と領属目的語しか言えない。

告他的密 彼を密告する。

* 跟他告密

* 告密他

「はらをさぐる」は“告密”のタイプ、すなわち対象を所有格で導入する複合語と考えられる。「真意をさぐる」となると二語と考えるべきであるが、やはりその全体にたいして対象名詞を「の」で導入できる。

真意をさぐる。 → 彼の真意をさぐる。 ?彼にたいして真意をさぐる。
疑いをとく。 → 彼の疑いをとく。 彼にたいして疑いをとく。

「疑いをとく」「疑いをまねく」は複合語か熟語か微妙であるが、「疑いをとく」は上のように対象を「の」で導入できる。「疑いをまねく」は下のように「から」格でも導入できる。

疑いをまねく。 → 彼の疑いをまねく～彼から疑いをまねく。

「はらをさぐる」は「～は～のはらをさぐる」のように主体と「の」で導入される対象をとりうる。「さぐる」は自動の対をもたない。そして二項はどちらも現れる必要がある。一項的な自動は不自然である。

一項	二項
?私ははらをさぐった。	私は上司のはらをさぐった。
?上司ははらをさぐった。	

この点で「あてがはずれる」が「新店舗はあてがはずれた」「集客はあてがはずれた」のように一項文が主体でも対象でも可能となる複合動詞と異なっている。

この「はらをさぐる」は「の」格で対象をとるが、その対象を主語とした受動文が可能となる。

能動 私は上司のはらをさぐった。

受動 上司は私にはらをさぐられたくない。

したがって「はらをさぐる」は他動的な複合動詞である。これにたいして「はらをきめる」は、受動がいえない。「はらをきめる」に付加する「の」格は対象ではない。

能動 私は辞任のはらをきめた。

受動 辞任は私にはらをきめられた。

「はらをさぐる」の場合、「の」格が他動的な目的語で、それを主語とした受動文をつくれるので他動であるとしたが、「つてをたよる」「つてをたどる」の場合どうだろうか。

二項？

一項

私は親類のつてをたよって 東京にいった。
私はつてをたよって東京に行った。

この場合の「の」格は対象ではなく「つて」にたいする修飾語である。「親類」は対象ではないので、これを主語にした受動文はつけれない。「親類は私につてをたよられた」とは言えない。「つてをたどる」も同様である。

「はらをさぐる」に類する「の」格で対象をとるものには「しっぽをつかむ」がある。

能動 私は不正経理で彼のしっぽをつかんだ。

受動 彼は不正経理で私にしっぽをつかまれた。

「手を借りる」の場合、「の」格で対象を導入するが、対象名詞を主語とする受動は成立しないが「手を貸す」という形で可能になる。

能動 私はあなた方の手を借りる。

受動 あなた方は私に手を借りられる。→あなた方は私に手を貸す。

これは「知恵を借りる」でも同じである。

能動 我々は先生の知恵を借りた。

受動 先生は我々に知恵を借りられた。→先生は我々に知恵を貸した。

もっとも「耳を貸す」（ひとの話をよく聞く）の場合は、そもそも対象は「に」格でとる。これは1.5で見たように自動である。

二項

能動 彼是我々の意見に耳を貸す。

受動 *我々の意見は彼に耳を貸される。*我々は彼に耳を貸される。

一項

彼は我々に耳を貸す。

5 「しゃくにさわる」 — 「が」格をとり一項文は自動～所動

「しゃくにさわる」も「しゃく」は拘束形態素と考えられ²¹⁾、複合語である。この場合、対象名詞は「が」格で導入される。

一項

?わたしはしゃくにさわる。 わたしは彼の態度がしゃくにさわる。
彼の態度はしゃくにさわる。

二項

どちらもおもしろいのは「あてがはずれる」は主体だけ、対象だけという一項文が可能であった（「新店舗はあてがはずれた」「集客はあてがはずれた」）が、「しゃくにさわる」の場合主体だけ的一项文は、文脈がないと不自然なことだ。「私ほんとにしゃくにさわる。あの店員の態度。」のように対象が補われる必要がある。

主体が主語となる一項文「私はしゃくにさわる」と対象を主語とする一項文「彼の態度はしゃくにさわる」は、前者が能動的自動、後者が所動的自動である。さきほど取りあげた「あてにできない」も「われわれはあの人をあてにできない」という二項文は、主体だけを主語とする一項文「我々はあてにできない」と対象を主語とする一項文「あの方はあてにできない」が可能であったが、後者がより自然である点で同じことである。

このように「が」格で対象を導入するものには「あたまにくる」「カチ

ンとくる」「グサリとくる」などの感情表現の複合動詞があると考えられる。これらは「しゃくにさわる」と同様の統語特性をもっているだろうかという点、少し違いがある。

一項

わたしはあたまにきた。
彼の態度はあたまにきた。

二項

わたしは彼の態度があたまにきた。

「あたまにくる」の場合、一項文の主語となれるのは対象を主語とした所動の場合だけでなく、「わたしはあたまにきた」のように主体を主語にとってもさほど不自然ではない。

この種の二項文は、一般の感情形容詞「すきだ」が「私は美空ひばりがすきだ」という二項文をもち、自動として「美空ひばりはすきだ」というのと似ている。

二項自動文が一項になる場合、主体でも対象でも可能か、どちらか一方しか可能でないかという問題は、中国語にもあるので触れておこう。“小心”が一項文になれるのは主体が項になる時だけであり、“讨厌”が一項文になれるのは対象が項になる時である。

一項 (主体)

你很小心。〈あなたは小心だね〉

二項

你要小心他。〈あなた彼に気をつけて〉

一項 (対象)

他很讨厌。〈彼はいやな奴だ〉

二項

我很讨厌他。〈私は彼がいやだ〉

6 「らちがあかない」—動詞部は自動、二項文にならない

「らちがあかない」は語源的には「らち」(馬場の周囲の設けた柵、転じて物事の区切り、適当な範囲)と「あかない」に分析できる。これは辞書でも熟語と扱い『精選版日本国語大辞典』によると、〈てきぱきとことが運ばない、きまりがつかない〉という意味である。「らちがない」は〈とりとめがなく、つまらない〉という意味である。

「らちがあかない」は「みているだけではらちがあかない」(『広辞苑』)のように「で」「では」が使われる。これは節となり、名詞句ではない。しかし「はらがたつ」のように「に」格で対象名詞をとともなうものが、対象名詞をとともなってもともなわなくてもよいものとは異なり、かならず「～ではらちがあかない」のように「～では」という状況句をとともなう。この意味では一項的な複合語である。

「らちがあかない」は状況句をとともなうが、たんに主体だけをともなう一項的な複合語もある。「くびがつながる」「かどがとれる」のようなものである。これらは動詞部は自他対応形をもたず、自動だけである。

私はくびがつながった。	*私はくびをつなげた。
彼はかどがとれた。	*彼はかどをとった。

「くびがつながった」は、「彼は課長のくびがつながった。」と「の」格をとっても、「課長」は対象名詞ではない。これらは「死ぬ」「変わる」のような所動的動詞(対象を主語にとる自動詞)と同じ統語的な性質をもつと考えられる。そう考えると、一項は主体と述べたが、これは能動的自動主ではなく所動的な自動主、つまり対象であり、だから対象名詞をさらにとって二項文を形成しないのだと考えられる。

注

- 1) Chao, Yuen-Ren “A Grammar of Spoken Chinese” University of California Press, 1968. 詳細は鶴殿2010参照。
- 2) 語と句(フレーズ)の問題については、以下参照: 吕叔相「汉语语法分析问题」『吕叔相文集第2卷』商务印书馆、2004
- 3) 「きりがたつ」の「きり」は「霧が濃い」「霧にむせぶ」など他の動詞と結合できるが、「はらがたつ」の「はら」は「はらを整理する」「はらが白い」「はらが大きい」などと言いくく、動詞、形容詞との結合に制限があるので、拘束形態素と考えられる。
- 4) 小学館『精選版日本国語大辞典』
- 5) 趙元任の用語“V-O compound”の訳語。上で言及した。
- 6) 趙元任の用語 exocentric に対する丁邦新(『中國話的文法』中文大學出版社、1980)の訳語。動賓の形態素が遊離せず他動詞となるものを言う。これに対

- し遊離して自動的になるものを edocentric 向心的という。構造主義言語学の用語であり、それぞれを「外心的」「内心的」と訳すこともある。鶴殿倫次 2010「動賓複合語と領属目的語について(1)」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第43号参照。
- 7) 後述するように形態素「つける」と「つく」は自他対応しているが、複合語としての「気をつける」は他動詞ではない。「私は彼に気をつける」は受け身文「彼は私に気をつけられる」とすることはできない。つまり統語的には自動詞なのである。
 - 8) 「私の車がワゴン車にぶつけた」は「ワゴン車は私の車にぶつけられた」と受動にすることができる。「に」格を対象とする他動は、その対象を主語とする受動文に転換できる。
 - 9) 影山太郎『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版、1996
 - 10) 「僕は彼にはらをたてられてねー、よわっているんだ」というのは自動詞としての迷惑の受け身である。
 - 11) 中国語の「二項自動文」については以下を参照：鶴殿倫次「中国語動詞の意味論—中国語の二項自動文について—」工藤他編『現代中国への道案内II』白帝社、2009、p. 9-33。
 - 12) 「女房に株に手を出された。」は迷惑の受け身。
 - 13) 「彼に新分野に足を踏み入れられた。」は迷惑の受け身。
 - 14) 「息子に悪の道に入られた。」は迷惑の受け身。
 - 15) 「われわれは彼に新企画にへそをまげられ、こまっている」は迷惑の受け身。「へそをまげる」が自動である証し。
 - 16) 「所動」は三上章の用語。Valenz 理論でいえば意味役割「対象」(中国語の配価文法でいう「当事」)を主語とする自動、「かたまる」「うごく」などのことを言う。
 - 17) オースティン流に言えば「彼は“ばかやろう”と言った」が発語行為であるとする、「彼は怒った」は発語媒介行為となるのだろうか。J. L. オースティン(坂元百大訳)『言語と行為』大修館、p. 175-176。
 - 18) 「借金のあてを探す」という表現が可能だとすると、「～のあてがない」という表現から派生したものと理解できる。「あて」は独立して使用しにくい。
 - 19) 「私は切符入手のあてをはずされた」が可能であるとしても迷惑の受け身としてである。
 - 20) ちなみに対象を「の」格でとるものに「～のはらをさぐる」があるが、これは動詞部が他動であって、複合語としても受動が可能で、他動詞ある。
 - 21) 「いかがなされました?」「持病のしゃくが」という場合は、自由形態素と言えるかもしれない。しかし現代語としてはこうした「しゃく」はもはや使用されず、「しゃく」は「しゃくにさわる」「しゃくだ」のような場合しか現

れない。「しゃく」の語義は「胸部、腹部のけいれん痛」という意味だが、「しゃくにさわる」では「けいれん痛にひびく」という意味ではなく、「はらだたしい」という意味であり、慣用的複合語である。

参考文献

- 鵜殿倫次「中国語動詞の意味論—中国語の二項自動文について」工藤他編『現代中国への道案内Ⅱ』白帝社、2009
- 鵜殿倫次「動賓複合語と領属目的語について(1)」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第43号、2010
- J. L. オースティン(坂元百大訳)『言語と行為』大修館、1978
- 奥津敬一郎「自動化・他動化および両極化展形—自・他動詞の対応」須賀一好他編『動詞の自他』(日本語研究資料第1期第8巻)、ひつじ書房、1995
- 影山太郎『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版、1996
- 小林桂吾「中国語における動賓複合語について」愛知県立大学外国語学部卒業論文、2006
- 史有为「划分词的普遍性原则和系统性」『语法研究与探索』(一)北京大学出版社、1983
- 柴谷方良『日本語の分析』大修館、1978
- 朱德熙『语法讲义』商务印书馆、1982
- 周上之2006『离合词研究 汉语的语素、词、短语的特殊性』上海外语教育出版社
- 趙元任1968, *A Grammar of Spoken Chinese*, University of Colifornia Press
- 呂叔湘訳『汉语口语语法』商务印书馆、1979
- 丁邦新訳『中国語的文法 増訂版』中文大学出版社、1980
- 角田太作『世界の言語と日本語』くろしお出版、1991
- 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版、1991
- 三上章『日本語の構文』くろしお出版、1963
- 陆检明2005『现代汉语语法研究教程 第三版』北京大学出版社
- 陆志围『汉语的构词法』商务印书馆、1957
- 刘月华他『实用现代汉语语法』外语教学与研究出版社、1983
- 相原茂他訳『現代中国語文法総覧』くろしお出版、1991
- 呂叔相「汉语语法分析问题」『呂叔相文集第2巻』商务印书馆、2004
- 袁毓林・郭锐主编『现代汉语配价语法研究 第二辑』北京大学出版社、1998